

麥谷邦夫編『三教交渉論叢』書評

三教交渉論、そしてその先へ

松 下 道 信

もはや儒教・道教・佛教の一教だけを論じていてよい時代ではない——これが本書のメッセージである。

これまで儒道佛三教の交渉を扱つたものとしては、戦前の常盤大定・久保田量遠らにその先駆を見いだすことができる。⁽¹⁾ 戦後の道教研究では、鎌田茂雄氏が三教合一⁽²⁾という名の下にどういう關係があるのかを問わねばならないとして、それまでの全眞教の三教合一論に一石を投じ、これを受けて窪徳忠氏がその分析に着手したことなどが一つの畫期として挙げられよう。⁽³⁾ これはまた荒木見悟氏らの活動とほぼ同時期に當たる。「三教合一」から「三教交渉」へ——。それまで「三教合一」「三教調和

論」等といわれ、それ以上分析されることが少なかつたその内實が問われるようになつて、すでに半世紀近くが経とうとしている。こうしてみてみると冒頭のメッセージは目新しいとはいえないかもしれないが、それでも依然として十分成し遂げられているとはいひ難いものである。

ここで本書編纂の意圖とその經緯について觸れるならば、麥谷邦夫氏のまえがきに次のように書かれているのが參照されよう。「本書は、京都大學人文科學研究所において、二〇〇〇年四月から二〇〇五年三月の五年間にわたつて行われた『三教交渉の研究』共同研究班の研究

成果報告書である。……本報告書に收められた二十二篇の論文は……中國の宗教、思想、學術、文學などのさまざまなジャンルにおいて、三教それぞれが個別に果たした役割および中國社會における三教間の複雜な關わりを、共同研究で得られた共通の認識を踏まえて明らかにしようとしたものである」（まえがき¹）。すなわち、本書は儒道佛の三教交渉を主眼とした論集であり、これまで個別に行われていた三教交渉論が、意識的かつまとまってなされているという點でその意義は大きいといえよう。

本書の構成は、以下の通り。なお各論文の番號は評者が便宜的に附けた通し番號である。

まえがき 麥谷邦夫

- ① 「六朝靈寶經に見える葛仙公」 神塚淑子
 - ② 「六朝後半期における科戒の成立——上清經を中心
に——」 都築晶子
 - ③ 「六朝から唐の道教文獻に見られる夷狄と外道」
山田 俊
-
- ④ 「道教義枢」と南北朝隋初唐期の道教教理學」
麥谷邦夫
 - ⑤ 「『五老寶經』小考」 垣内智之
 - ⑥ 「成玄英の「道」の再考」 孫 路易
 - ⑦ 「『眞龍虎九仙經』の内丹思想」 坂内榮夫
 - ⑧ 「道教における「本然の性」と「氣質の性」——
つの「性」と「神」をめぐって——」 橫手 裕
 - ⑨ 「清代道教と密教——龍門西竺(心宗)——」 エスボジ
ト モニカ(梅川純代譯)⁵
 - ⑩ 「道教の功德儀禮の科儀について——臺南市の一朝
宿啓の功德儀禮を例として——」 山田明廣
 - ⑪ 「聖者觀の一系統——六朝隋唐佛教史鳥瞰の一試論
——」 船山 徹
 - ⑫ 「『究竟大悲經』における衆生觀と太極」
池平紀子
 - ⑬ 「劉子と劉晝」 龜田勝見
 - ⑭ 「唐代士人の儒佛論に關する一考察——合一の思考
と辨別・排斥の思考——」 藤井京美

- (15) 「韓愈の排佛論と師道論」 古勝隆一
- (16) 「道佛宗教者の出生の不思議——あるいは神話と傳記——」 佐野誠子
- (17) 「敦煌の孝子傳」 小南一郎
- (18) 「李商隱を茅山に導きし者——從叔李褒」 深澤一幸
- (19) 「蘇東坡の信仰」 宇佐美文理
- (20) 「南宋における儒佛道三教合一思想と出版——王日休『劉舒淨土文』と『速成法』を例として——」 金文京
- (21) 「内丹劇初探——蘭茂『性天風月通玄記』」 秋月英行
- (22) 「求子之道と占星術」 嚴善炤
- 一般語彙索引
固有名詞索引
英文目次

まず本書の構成について觸れておくと、それぞれ時代

順に①神塚論文から⑩山田論文までが道教に主軸を置いた論文、⑪船山論文以降が佛教または儒教に主軸を置いたものという構成になつてゐるようである。ただそれが明示されていない上、後半の⑫秋月論文のタイトルに「内丹劇」という語があるなど、やや構成が把握しにくい印象を受ける。また本書の元となつた共同研究班の活動経緯を踏まえるのだろうが、三教交渉が議論の中心ではないものも散見され（例えば①⑤⑥⑦⑩論文）、本論叢の趣旨を弱めている觀があるのは否めない。内容が廣範にわたるだけに、讀者の理解を助けるためにもある程度、構成の配慮が慾しかつた。

さて本来全ての論文の内容について紹介すべきだが、紙幅の關係からそれができないことを諒とせられたい。ここでは本書『三教交渉論叢』の眼目である三教交渉論がそれぞれの論文でどうなされているかという點に絞り、その問題點と展望について以下にすこし論じてみることにしよう。

まず二教の範圍について、麥谷氏はまえがきの中でこ

う述べている。三教とは、儒教・道教・佛教の中國を代表する三つの「教」である。この「教」の概念は「宗教」よりも廣く、「近代的な「宗教」の定義に儒教・佛教・道教の三教が該當するかどうかという議論はもとより重要ではあるが、中國人自身が何を「教」と認識してきたかということが、歴史に即して三教を考える場合にはより重要である」（まえがき¹¹）として「教」をめぐる儒道佛の議論を概観する。この問題については後述するが、やがて明治以降「宗教」という概念が導入され、「教」と「宗教」という概念の間に断絶ができたことに伴い、儒教が「宗教」かどうか問われるようになつた。

とはいゝ儒家には本來祖先祭祀などがあり、やはり「宗教」といいう側面は否定できない。こうしたことから、麥谷氏は三教を「宗教」として認める立場に立つてゐる。こうした麥谷氏の「教」や「宗教」の關係に關する指摘は非常に重要なものであろう。

しかしそこし補足しておきたいのは、近代に儒教が非

「宗教」とされたのは、佛教が逆に「宗教」とされたこ

とと表裏をなしているということである。明治期、佛教は、ヨーロッパにおけるキリスト教に範を求めて、一方で「哲學」としての佛學を生み出しつつ、また一方で「宗教」化していくのであって、決して「教」が即座に「宗教」にスライドしたのではなかつた。¹²

この宗教／教の問題は根深いようと思われる。例えば⑩宇佐美論文では蘇軾の詩作と佛教や超越者——宇佐美氏はこれを「かみさま」（六四二頁）と和語で呼んでいる——の關係を分析し、一般に蘇軾が佛教を「信仰」していたと安易に論斷することに警告を發してゐる。それは「近代の宗教學……に染まつてい」（六四五頁）るというのである。宇佐美論文を單純化していえば、我々がいう「信仰」と蘇軾の時代の「信」のずれが問題となつてゐるが、それは佛教の宗教／教という断絶と軌を一にしているといえよう。なお、本來日本になかつた道教が暗黙のうちに「宗教」とされたことについても十分検討されねべき課題であろう。

この問題に絡んで、⑪船山論文と⑫佐野論文に見える

「聖」の違いについても指摘できるようと思われる。船山論文は基本的に佛教教義の定義に従つて「聖者」を議論しているのに對し、佐野論文では恐怖を伴う「宗教者の聖性」(五三七頁)について觸れ、ルドルフ・オットーを想起させるよつたより廣い「聖」概念になつてゐる。もつともそこに即座に違和感を感じさせないのは、道佛二教の傳記に對して、緯書に見える出生譚を持ち出し、比較するという着實な作業に基づいているからかもしれない。

次に二教交渉論について述べよう。一口に三教交渉といつても、それぞれの教義・思惟における根本的な對立・調和から、語彙の轉用・借用、人々の交流に至るまで、その交渉のあり方は幅廣い。また本書ではあまり議論されていないが、三教交渉論が包含するであろう二教合一論ひとつを取つても、例えは三教それぞれが棲み分ける三教鼎立型の合一論と、一教が他の二教を包含する形の一一致論があるなど、いくつかの定式化が可能である。こうしたいくつかの基本的な類型化を推し進めるこ

とは、これから二教交渉論に有用であるように思われる。そうした中、(14)藤井論文が韓愈の排佛論を含む唐代の儒佛二教の關係を取り上げる中で、三教間の排除・辨別の論理およびその論理の出現・消滅という、より抽象的な關係に思考が及んでいるところは特筆に値しよう。

同時に(20)金論文が指摘するように(六八一頁)、内在的要素だけではなく、社會と時代という外的要請の側面も看過されではならないだろう。具體的には金論文の場合、宋代の出版化による知識の普遍化に伴い、三教交渉がさらに推進されただらうことを指摘している。

ところで、(2)都築論文は上清經の戒律を取り上げ、それが『禮記』等の古來の觀念に淵源を持つと同時に、當時の「國家祭祀の次元、さらには社會全體」(六七頁)に根ざし、上清經の教義體系の中で規範化・制度化されていふたとする。一方、(17)小南論文は、中國撰述經典の『父母恩重經』や敦煌の孝子傳に見える孝の觀念には、從來の儒教的・父權的要素が少ない代わりに母親が重視され、民衆層の孝の見方が影響してゐるという。ここで

問題となるのは、三教の意識化・制度化されている部分とそれを支えるより廣い層との關係であろう。こうした差違は、民間宗教／道教の關係や、一般的習俗／儀禮化された儒教といった議論と絡んでくる問題でもある。また(22)嚴論文では胎產術を「一種の道術」「方術」(七〇七頁)と述べるが、いわゆる術數を基礎に道佛との關わりを説いているといつてもよいだろう。中國の學術の總體は、けつして三教に盡さるわけではない。嚴論文は術數に基盤を置いた議論をしていくという點で、三教交渉論の限界をさらりと抜け出でていて観すらある。

結局、三教交渉論は含意として必然的に「成立した」三教間の交渉に限られる。だが三教それぞれに、成立以前の未分化な段階との搖らぎや交わりが常に存在し、影響を受けているのであり、またその一方で醫學・術數の分野や、更には本書で取り上げられていない明清期の民間宗教など、目が行き届かない部分が存在するという方法論上の限界について記憶しておかねばならないだろう。最後にもういちど麥谷氏のまえがきに戻りたい。いま

「成立した」三教と述べたが、この點に絡んでまえがきの中では、宗教／教という問題以前に、道教が儒佛二教と並ぶ「教」であるかどうかについての議論が存在したことについて觸れられている。⁽²³⁾注意したいのは、麥谷氏が道教の「教」の論理の成立を唐の孟安排『道教義枢』序や周固樸『大道論』垂教章に認めるその一方で（まえがき注）、本書に見えるように、それ以前の六朝期でも三「教」交渉論が成立しているということである。無論、他から「教」と認められることとみずから「教」と考えることは別である。だがこうして見てくると、むしろ我々は、本書の各論文がこれとは違うレベルで儒道佛の三「教」の交渉を論じ、それが議論として成立している點に注意を拂うべきなのかもしれないとも思えてくる。すなわち、三教交渉論は、これまでの經緯から儒教や佛教といった議論の枠組みを壊すことにはずかって力があった。それは、主としてインド哲學科や佛教學科で佛教が、中國哲學科で儒教が研究されたという明治以降の我々の教育體制やディシプリンとも無關係ではないので

はないか。それとも「教」としての道教の成立と共に、我々の三教交渉論自體も變質しているのだろうか。こうした點について本書を通じて明らかにされていないが、興味深い問題である。

我々はもはや、三教交渉論が持つ有效性とその限界について自覺的に考えるべき時期に來ていているのかもしれない。ただ、その先に我々がどう進むにせよ、本書は三教交渉論の一つの良き里程碑として記憶されることになるだろう。

(A5判 七三三二十一頁 一〇〇五年三月 京都大學人
文科科學研究所刊)

註

- (1) 常盤大定『支那に於ける佛教と儒教道教』(東洋文庫、一九三〇)、久保田量遠『支那儒道佛交渉史』(大東出版社、一九四三)
- (2) 「新道教の形成に及ぼした禪の影響」『宗學研究』2、一九六〇
- (3) 「金代の新道教と佛教」『モンゴル朝の道教と佛教』所収、平河出版社、一九九二「一九六二初出」

(4) 荒木見悟氏は、儒佛の枠組みを越え、華嚴教學・圓覺思想から朱子學・陽明學への力動的な關係を描き出している(『佛教と儒教』平樂寺書店、一九六二)。

(5) 私事になるが、評者は一〇〇一年十二月の冬至の日に「小さくて貧相な道庵」(三〇〇頁)の桐柏宮の庵主である張高澄師に拜師、入道した。張師は謝崇根師に師事し、葉高行とは同門である。張師によると、葉高行は「アメリカへ到着した翌日に」(三〇二頁)急逝したのではないとのことだ。趙子廉編著『桐柏春秋』(天馬圖書有限公司出版、一〇〇三、二八七頁)にも、「一九九九年十二月一日アメリカ到着、十四日羽化と記されている。その他、「原息」(三〇一頁)についても、張師は「胎息」といういい方以外聞いたことがないと述べていたことを補足しておく。なお三〇四頁二行目「南宋内丹」は「南宋内丹」の誤りであろう。

(6) 實際には、ここで取り上げられている内丹劇は、道士ではなく、蘭茂という雲南で活動した明代知識人の作なのでこの位置に置かれているのだろうと思われる。

(7) 宮川敬之「近代佛學の起源」(『中國哲學研究』12、一九九八)参照。

(8) たとえば全真教南宗の張伯端は三教鼎立型、五祖白玉蟾は一教包含型の三教一致論である。拙論「全真教南宗における性命說の展開」(『中國哲學研究』15、二〇〇〇)

(○) 参照。

(9) 「」の問題について先行するものとしては、小林正美

「三教交渉における「教」の概念」([六朝道教史研究] 創文社、一九九〇) がある。

〔附記〕 なお京都大學人文科學研究所のホームページから本書のPDF版が取得できる」とを附記しておく
(<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/kyodo-pub.cgi?pub-sort.csv>)。

『東方宗教』バックナンバー 在庫一覧

| | |
|--|--------|
| 1~10號 合訂本 | 5,000圓 |
| 6, 10, 19, 20, 23, 24, 29, 32, 36, 55, 56號 | 800圓 |
| 63, 66, 67, 69, 71~80, 82號 | 1,200圓 |
| 87, 88號 | 2,000圓 |
| 91, 93, 94號 | 2,600圓 |
| 95~108號 | 2,800圓 |

購入のお問い合わせは下記まで。

〒175-0082 東京都板橋区高島平1-10-2
東方書店業務センター
(担当、稻葉晉吾)
TEL 03-3937-0300
FAX 03-3937-0955
E-mail: sinaba@toho-shoten.co.jp